

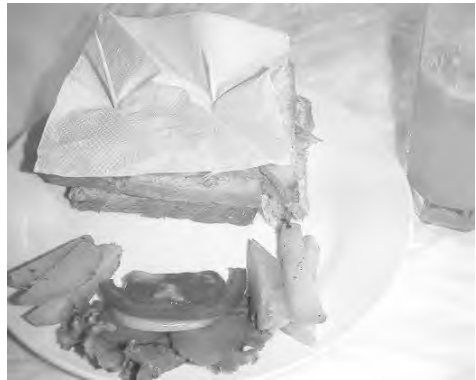
〔その他〕

グローバル化の行き着くところ 2004年の記憶¹

櫻井 郁男（シンガポール日本人幼稚園園長）

中華人民共和国、成都から飛行機で2時間、チベットの拉薩に降り立ちます。この町の繁華街にはブランドもののバッグや高級時計（真贋不明）がショウウィンドウを飾り、ちょっとしゃれたレストランではクラブサンドウィッチとレモンティがあたりまえのように提供され、ホテルではインターネットを楽しむことができます。

ここから4輪駆動車で2日走り続けたチョモランマの登山基地でも、カラーテレビには上海や香港の観光スポットがコマーシャルの背景として流れています。もちろん携帯電話も、なに不自由なく使えるのです。



拉薩のレストラン

ホテルを1歩出れば4000mの高原、地平の彼方まで緑の草原が広がり、遙かに雪を頂くヒマラヤの峰々が輝いています。遊牧による自給自足の時代そのままの生活をしているかのように思える若者は、自分の将来をどのように描いているのでしょうか。

我が国の歴史と重ねれば「坂本竜馬」の時代か「坂の上の雲」を思いだし、登場人物と山羊やヤクを追う少年が重なってきます。彼らの中に「ボクも、私だって、豊かになりたい」と行動を起こす若者がいることは容易に想像できます。

「ヒト」は有史以前より生きる糧を求め、移動しました。

産業革命以降の社会は工場が立つ地域に工場労働者が集まりました。このことは我が国でも例外ではなく「京浜工業地帯」に代表される地域をめざし、人々は地方から移動してきました。私が幼い頃のことです。

大航海時代以後、労働力として人々は移動させられました（奴隷）。第2次世界大戦後、冷戦後と世界中の人々は職を求め移動しました。西欧各国を見ましょう。たとえばスウェーデン。日本より数10年も早く少子高齢化を迎えたこの国は、安い労働力を確保するために移民を奨励しました。そしてEU発足と課題・影。

我が国は外国人労働者の受け入れに慎重な政策をとり続け今日まで来ています。そして労働人口の減少と相まって、日本の若者は豊かさを享受しつつ大人になり、外国人労働者と職を取り合うことがない時代を迎えるはずでした。

しかし、国内の若年人口が減少しているのだから、「就職は容易」だと考えるのは大きな誤算であると私たちは知りました。日本の大企業の多くが国際競争を克服するために、製造拠点を中国に移しました。引きずられるように、大工場を取り巻く中小企業も国内から中

国にリスク承知で引っ越しをしました（アウトソーシング）。

人が職を求めて移動する時代から、安い労働力を求めて職場が移転する時代なのです。

お子さんが中国の若者と同じ労働条件・賃金で働くとしたら、日本国内への送金など、思いもよりません。その中国でさえ、すでにアフリカ諸国に労働力と市場を求めています。



さらに、デジタル化の波により「学校で堅実に学び、知識や技能を習得すれば、中学・高校・大学……それぞれの学習歴に応じた仕事があり、そこでまじめに働けば幸せな人生が約束されていた」これは、もう過去のことなのです。

では、これからの子どもたちは、どのような能力を伸ばす必要があるのでしょうか。

青海省の草原で集う若者（現在青海鉄道が走る）

トーマス＝フリードマン（ニューヨークタイムスコラムニスト）は「アウトソーシング」の時代、アメリカ国内で働ける職場は有るのかという問いかけに答えて、彼なりの人物像（資質）を述べています。

以下『フラット化する世界』より要点の抜粋

「無敵の民」・・・フラット化する世界における無敵な市民とは

- ・偉大な共同作業（まとめ役）
- ・偉大な合成役
- ・偉大な説明役
- ・偉大な梃子入れ役
- ・偉大な適応者
- ・グリーン・ピープル
- ・熱心なパーソナライザー
- ・偉大なローカライザー

「理想の才能を求めて」

- ・自分の好きな先生のことを思い出すとき、教えてくれた細かいことは思い出せないが、勉強が刺激的で楽しかったことは覚えている。
- ・頭に残っているのは、授けてもらった知識ではなく、学ぶ喜びを教えてくれたことだった。
- ・ $CQ + PQ > IQ$ 、 IQ （知能指数）よりも CQ （好奇心指数）と PQ （熱意指数）が重要。
- ・友人が、ノーベル賞を受賞している物理学者のイシドル・I・ラビに、どうやって科学者になったのかと尋ねた。「家に帰ると母親が授業のことを毎日質問した」とラビは答えた。何を習ったかに興味があったのではなく「今日はいい質問をしたの？」と常に訊いた。「いい質問をすることで、私は科学者になった」とラビは言った。
- ・フラットな世界でのばすことのできる最初の、そして最も重要な能力は、「学ぶ方法を学ぶ」という能力だ。古い物事をやる新しい方法や、新しい物事をやる新しい方法を、絶えず吸収し、独習する。たくさんの仕事の一部もしくは全部が、つねに「デジタル化」と「オートメーション化」と「アウトソーシング」される可能性がある時

代では、どんな労働者もこの能力を身につけるべきだ。新しい仕事や全く新しい産業は、そこでどんどん生まれている。そういう世界では、自分の知識だけではなく「物事を学ぶ」やり方で、人と差をつけることができる。なぜなら、いま知っていることは、思ったより早く時代遅れになってしまう恐れがあるからだ。

さて、そろそろ結びが必要です。例に挙げたチベットは明治時代の日本、急発展を遂げている華南等の沿岸都市部は戦後の日本そのものです。経済特区や沿岸部に若者が集まり「金の卵」は将来を夢見て目を輝かせ、働いているように見えます。中国製品は「安い・悪い」「環境汚染」これも私たちの国がたどり克服してきた現実です。



シガツェからテンリーへ向かう、チョモランマのベースキャンプへの道（車が泥濘にはまった際、どこからともなくやってきて助けてくれた人々）

国境を越えた競争社会において、「日本人」として生まれたアドバンテージに甘えることはできない時代です。また、国家間の格差を前提とした「富」「豊かさ」の独占はあり得るのでしょうか。また、あって良いのでしょうか……。

そこで、これからの社会で生きていく若者に語りかける言葉としては「生涯にわたって深く考え正しく判断し、行動することができるよう、日々の学びを大切にしましょう」と云うことにつきます。

皆さんのお子さんは「金の卵」の「ひ孫」世代です。

参考文献

トーマス＝フリードマン 『フラット化する世界』 伏見威蕃訳 日本経済新聞社 2006年5月、1版

¹ 初出：「保護者会のごあいさつに代えて」2015年9月 着任挨拶 わらべ北京こども園にて